

「日中翻訳リテラシー教育」の取り組み  
—大学学部における翻訳教育の一環として

Introduce about 'Translation and Interpreting (TI) Literacy' into Chinese TI  
Education at the Undergraduate Level.

板垣友子

Tomoko ITAGAKI

目次

- 1 はじめに
  - 2 翻訳通訳リテラシー教育とは
  - 3 日中翻訳リテラシー教育の実践
  - 4 終わりに
- 参考文献

1 はじめに

翻訳・通訳者養成について、大学・大学院における専門教育の状況の分析、実践報告などの先行研究は、日本においては主に日英両語間で発表されてきた。大学の学部における翻訳通訳教育についてはいくつかの先行研究があるが、翻訳通訳教育の目標設定について「外国語教育の一部として『語学力の強化』や『異文化コミュニケーション教育』の目標を掲げる翻訳通訳コースが多数を占める」(武田,山田,辛島,2014)とされ、この目標は学部の中国語教育においてもほぼ同様ではないかと推測できる。

外国語教育では、近年 TILT(translation in language teaching)という、通訳翻訳を外国語教育に取り入れるアプローチが注目されている。染谷(2010)によると、翻訳という作業を通して学習者が言語の「深い処理」(起点・目標テキストの表層的な等価ではなく、意味的・語用論的な等価を実現するための原文の深い解釈)ができるようになり、言語能力強化、第二言語習得が促進される効果があるという。

つまり、学部での通訳翻訳科目が、「外国語教育の一環として、言語的メタ認知能力、異文化コミュニケーション能力の養成のためのツール、アプローチの一つとして捉えられている」(武田他,2014)とするのであれば、真の意味での翻訳通訳教育とは目標が異なっているのかもしれない。

山田・立見の「翻訳通訳教育のオンライン教材化(e-learning化)に向けて」では、

大学・大学院での通訳翻訳教育の意味・意義について、以下のように述べている。

- ・ 選抜された学生に専門的かつ体系的な教育の提供が可能。
- ・ 高等教育機関での通訳翻訳者養成という国際基準に準拠 (ISO17100)
- ・ 研究と教育が直結している点
- ・ 大学院が関与することで、通訳翻訳の専門職化・社会的認知度を向上できる。

山田らは、ISO が目指す通訳翻訳者の標準化したスキルを持つ実務家の養成を目指し、学部ではその基礎体力づくり、つまり語学力と翻訳が複雑な要因と関わっていることを認識するメタ言語能力をつけるべきだとしている。そこに、翻訳リテラシー教育の必要性がある。

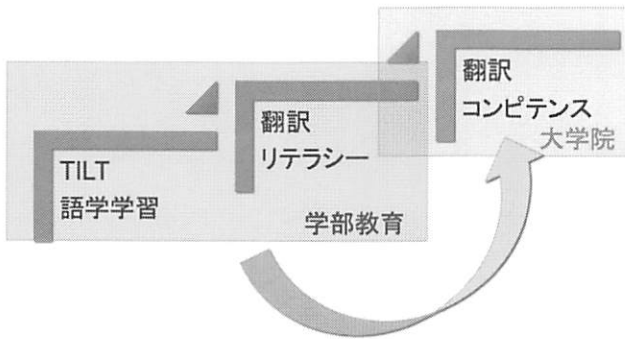


図1: 「翻訳通訳教育のオンライン教材化 (e-learning化) に向けて」より

また、武田らは学部学生に対して通訳通訳者への道筋を示すべく、「通訳通訳リテラシー教育」を提案している(2014)。その内容を見て、筆者は杏林大学での日中翻訳教育にも取り入れられないか考えた。筆者はこれまで10年以上、日中翻訳演習というタイトルの演習で実践的な翻訳を指導してきたが、2021年度には学部の3、4年生向けに「日中翻訳ワークショップ」を新たに担当することになり、日中翻訳のリテラシー教育もカリキュラムに含めることができた。それは、翻訳者としてのキャリア養成への動機付け、また研究者への動機付けという、今までの学部授業にはなかった目的を持つ授業を提供するためである。

本論では、日英の通訳翻訳リテラシー教育の実践や先行研究を参考にしながら、日中翻訳リテラシー教育についてその意義を再構築し、試行を紹介しながら、基本的アプローチ、コンテンツなどについて考察し、まずは初歩的な提案をしたい。

## 2 翻訳通訳リテラシー教育とは

「リテラシー」とは「読み書き能力。また、与えられた材料から必要な情報を引き出し、活用する能力。応用力」と定義されている（『デジタル大辞泉』小学館, 2021）。また、ある特定の分野で必要とされるリテラシーは「領域固有リテラシー」と呼ばれ、「特定の共同体において必要とされたり好まれたりする認知・行動様式に基づくリテラシーである」（『最新心理事典』平凡社, 2013）とされる。

武田(2017)では、翻訳通訳リテラシー教育について、目的と意義、実践報告を紹介している。武田は2015年に導入された翻訳業務に関する国際規格 ISO17100 の中で、翻訳者の資格を「a 高等教育機関が認定した翻訳の卒業資格、b 高等教育機関が認定した翻訳以外の卒業資格及び専業専門家として2年の翻訳経験、c 専業専門家として5年の翻訳経験」のうち、どれか一つを満たすこととしていることを挙げているが、大学・大学院で「翻訳の卒業資格」は、一部大学院を除いては今後の課題となるとしている。

また、武田(2017)は、翻訳通訳リテラシーを「メディアリテラシーや医療リテラシーなどの事例にならうもので、翻訳通訳の諸相を理解し対応できる基礎能力」と定義し、「通信技術が急速に進展したグローバル社会で異言語・異文化間のやりとりが日常的に発生している今日、翻訳通訳を介した情報の受容と発信の本質や仕組みを学び、またツールの評価・活用能力を備えることは、個人の知見や可能性の発展につながると考えられる」として、必要性を述べている。さらに武田らの立教大学における取り組みも紹介されている。（「翻訳通訳教育ポータル」）

さらに、翻訳通訳リテラシー教育を行うことについて、「翻訳通訳行為の諸相に対する包括的な理解を形成し、翻訳通訳の専門職訓練や研究の土台に提供することを目指すもの」としつ、その意義を挙げている。（武田ら 2014）

- ①翻訳者・通訳者に要求される特別なスキルと知識、機械翻訳の利点と限界などに対する理解を促進することで、翻訳通訳サービスとツールに関する誤解と誤用の削減に対しボトムアップ的な貢献ができる。
- ②翻訳通訳の仕組みについて基本的な知識があれば、多言語多文化社会におけるコミュニケーションに、より効果的な対応ができる。
- ③グローバル化された経済や文化、多文化共生社会、国際政治などにおける今日的課題に関する気づきが促される。
- ④諸外国のように大学院での翻訳者・通訳者の必要性が日本でも認知され、本格的な実施が根付くことに貢献できる。

武田らは翻訳通訳リテラシー教育の一環として、立教大学における全学共通科目『翻訳・通訳と現代社会』を開講した。その実践報告によると、2015年度には医療通訳、法廷通訳、字幕翻訳、文芸翻訳、翻訳通訳コーディネーターなど様々な分野のゲストスピー

カーによる講義と質疑応答を行なっている。

同時に、リテラシー教育の重要な一環として「翻訳テクノロジー教育」を取り上げており、さらにオンライン教材として「翻訳テクノロジーを学ぶ」をリリースしている。これは大学の授業で共有でき、テストや理解度チェックなども用意されており、教師の指導のもとで利用できる仕組み。

以上のような日英の通訳翻訳研究者による先行事例と研究を参考にしつつ、以下で大学・学部における日中翻訳リテラシーについて考える。

### 3 日中翻訳リテラシー教育の実践

#### 3.1 構成要素

杏林大学の中国語学科では「中国語のプロフェッショナルの養成」を目標として、通訳・翻訳に関する科目を多く設置している。しかし、学部ではISOで資格要件となる「翻訳の卒業資格」という明確なコースは設けておらず、「翻訳リテラシー」の内容はこれまで授業シラバスに入っていなかった。やはり第二言語運用能力の向上のための通訳翻訳科目であるという面は否定できない。大学院では翻訳リテラシーについて取り上げてきたものの、大学院の在籍者はほぼ中国語ネイティブであり、すでに学部で翻訳について学んできた彼らに対するリテラシー教育と、学部の日本語ネイティブ学生に対するリテラシー教育とは提供すべき内容が異なると思われる。本論では、学部の日本語ネイティブ学生対象の、翻訳者養成という視点を取り入れた日中翻訳リテラシー教育について検討してみたい。

武田(2017)では翻訳通訳リテラシー教育の構成要素として以下の項目を挙げている。

- ① 基本的なメタ言語の説明: 通訳翻訳学で用いられる「逐次通訳」「同時通訳」「起点言語」「目標言語」のような基本的なメタ言語と概念について具体例を用いながら説明する。
- ② 多様性: 様々な場面や領域における翻訳通訳事象について、直接的な経験をもとに情報を提供できる人たちの説明を受ける。多様な視点から多様な事例を提供することで、学生が翻訳通訳の実践に関して一枚岩的で単純な見方を形成することを避けられる。
- ③ コンテキストと役割: 移民、グローバル化された経済や国際紛争のような通訳翻訳サービスの必要性を生成するコンテキスト的要因と、翻訳者と通訳者が異言語・異文化間コミュニケーションにおいて果たす役割について言及する。
- ④ キャリアガイダンス: 通訳翻訳市場におけるトレンドと翻訳者・通訳者になるための専門的な訓練に関する情報、また、翻訳者・通訳者の職務倫理、資格、職能団体などについて基本的な情報を提供する。
- ⑤ テクノロジー: 機械翻訳や他の翻訳ツールの仕組みとその利点及び注意すべき点につい

ての基本的な情報を提供する。

⑥翻訳通訳の初歩的実習：翻訳通訳を実際に試みることによって、翻訳通訳実践の面白さ、難しさ、複雑さについての実感や興味を促す。

⑦ユーザー体験：ロールプレイなどの活動を通して、学生に翻訳通訳サービスやツールのエンドユーザーまたは依頼者の経験を持たせる。

⑧理論：学生が翻訳通訳を実際に経験したり意識したりした後に、クラスを通して学生が蓄積した知識を整理するツールとして理論を導入する。スコボス理論やテキストタイプ論はこれまでの実施例で効果的だった。

以上の構成要素は日中翻訳リテラシー教育を実施する上でも同様に取り上げる必要があるものの、具体的な内容については、武田らが立教大学で実施した日英翻訳中心の授業と日中翻訳に特化した場合とは自ずと異なる点もある。

以下に、筆者が試行した実践と課題について報告し、総括したい。

### 3.2 実践報告

2021年度における杏林大学の中国語学科3、4年生向けの選択科目「日中翻訳ワークショップ」全15回のテーマは以下の通りであった。（春学期、秋学期それぞれ完結）

	テーマ	授業内容
第1回	オリエンテーション	
第2回	翻訳の基礎知識 日中翻訳の諸相	メタ言語の解説 日中翻訳という仕事について 市場について
第3回	日中翻訳方法論1	初心者向けの方法論を紹介 武吉先生の中日翻訳論1
第4回	課題1(オンライン)	方法論に基づく日中翻訳実践練習
第5回	日中翻訳方法論2	武吉先生の中日翻訳論2 方法論 全員で課題を検討
第6回	日中翻訳方法論3	武吉先生の中日翻訳論 テクニック 全員で課題を検討
第7回	中日翻訳の注意点のまとめ	日本語表現の規範について用語辞典の紹介 書面語について、同形異義語、類義語について 課題はオンライン翻訳の実践 ツール 書籍、オンライン辞書など紹介
第8回	中日翻訳テクノロジー	AI翻訳の検討 課題は「ノルウェイの森」より

		課題について検討
第9回	翻訳ストラテジー	村上春樹の翻訳から翻訳ストラテジーを考える（林訳と頼訳の比較を元に） 課題は20年ネット流行語 中国語の新語流行語の翻訳を実例に 課題の
第10回	異化と同化1	検討 課題は文化要素の翻訳
第11回	異化と同化2	課題について検討
第12回	スコ-pos理論1	スポーツメタファーの翻訳を通じて検討する ストラテジーの解説。藤海理論を紹介 課題 は昔話
第13回	スコ-pos理論2	課題について検討 スコ-posについて ペロス「耳のなかの魚」から事例紹介
第14回	翻訳とは	牧野成一「翻訳でうしなわれるもの」 事例を中国語に置き換えて考える
第15回	期末試験	

この授業では日中翻訳演習に先立つ理論的枠組みを取り入れ、かつ実践を含む内容にするという授業目標を立てた。翻訳理論はヨーロッパで生まれ、変遷してきたものであり、学部生にとって、やや難解だろう。最初から異化や同化、スコ-pos理論などをテーマにして進めるよりも、日中翻訳の身近な例から翻訳について考えてもらう方が学部生には理解しやすいと考えた。そこから、村上春樹の中国語訳、新語流行語、童話の翻訳などに実際取り組んでもらい、そこから翻訳理論について学ぶという組み立てとした。また、日英翻訳の研究者の先行研究を取り入れ、日中英の3か国語による立体的な理論を構築することを試みた。

以下、「日中翻訳ワークショップ」の実際の授業内容について概略を紹介する。

第2回「翻訳の基礎知識 メタ言語の説明」は、「起点言語」「目標言語」などの言語間翻訳の用語を紹介しつつ、牧野成一『日本語を翻訳するということ』から、芭蕉の「古池や蛙飛び込む水の音」を英訳する場合、単数とするか複数とするかという例(P91)を挙げるなど、日本語と外国語との間にある思考の違い、民族性の違いなどの例をいくつか紹介する。ここではあえて日英の翻訳を挙げて、翻訳行為とは、という大きな概念を簡単に解説する。

「日中翻訳の諸相」については、ビジネス翻訳・ローカライゼーション、文芸翻訳、字幕翻訳などについて解説、市場について、また資格試験、ISO、日中翻訳者の置かれている現状について情報提供する。

第3回「日中翻訳方法論1」では、武吉次朗『日中中日翻訳必携』から翻訳論、「信達雅」の紹介。さらに日中の歴史的名訳例を挙げる。第4回は課題「単文」で漢語から和語への翻訳を考える。

Ex. 他认为他多年单身的主要原因是自己不够积极主动。→彼は自分が結婚できないのは引っ込み思案のせいだと思っている。

我的成绩跟大家的帮助是分不开的。→私の成績はみんなのおかげです。

第5回「日中翻訳方法論2」では、課題の単文の分析、評価を行い、武吉次朗『日中中日翻訳必携』から、翻訳のポイント①原文の理解力②訳文の表現力について解説する。ここでは主に「品詞の翻訳方法」について解説。

Ex. 動詞

1 削る 我喜欢吃饺子 我忘了带伞。

2 名詞形にする 我们决定召开会议。 我々は会議の招集を決定した。

3 自動詞を他動詞に変える 在山沟里偶然发现了古代壁画。 山奥で偶然古代の壁画が見つかった。

4 目的語の長い動詞はいったん切る。说, 说明, 表明, 认为, 希望, 相信

第6回「日中翻訳方法論3」では、「自然な日本語への訳出」のためのポイントを、実際の日中翻訳に使用するテクニックを中心に伝える。武吉先生と遠藤紹徳先生による(東方中国語講座4 翻訳篇)分類、「加訳」「減訳」「変訳」「倒訳」「反訳」「分訳」「合訳」について例を挙げて紹介する。

Ex. 「倒訳」过马路要看红绿灯, 以免发生交通事故。→交通事故に遭わないよう、道路を横断するときには信号を見る。

第7回「中日翻訳の注意点のまとめ」では、まず翻訳者としては、決まった「用語辞典」を使う必要があること。「記者ハンドブック」(共同通信)など、規範を守る重要性和同時に、日中翻訳の場合には、クライアントによって訳語も精査する必要があることを伝える。「日中」か「中日」か、「兩岸」、「台湾」その他政治的に敏感な部分があること。

さらに、「書面語について」、「同形異義語、類義語」について取り上げる。中国語にも書面語があり、大学の授業では学んでこなかった表現もあること、台湾の文章語などを確認する。日中翻訳では「同形異義語、類義語」に悩まされることが多い。一見同義語であるが、使用範囲がずれるなど、訳出上注意すべき事例を挙げる。

課題はオンライン翻訳。アプリを探して使ってみる。

第8回、「翻訳テクノロジー」では、翻訳で使うツール、オンライン辞書、オンラインでの検索、AI翻訳について伝える。

オンライン辞書や検索については、中国の検索エンジンを使うことを推奨。

AI 翻訳を実際に使っている学生も多い。ここでは、学生が任意の AI 翻訳ソフトを使い、例文を翻訳した結果を検討する。さらに「ポスト・エディット」について紹介し、翻訳実務での重要性を伝える。

課題は村上春樹の「ノルウェイの森」冒頭の中国語訳を日本語に訳すこと。

第 9 回「翻訳ストラテジー」については、村上春樹『ノルウェイの森』の林少華と頼明珠の 2 種の訳を例にとり、「ストラテジー(方略)」とは何か、異化、同化という全体的な方針とともに、「直訳か意識か」「意味重視かコミュニケーション重視か」などの対立点を挙げて、訳文の比較を通して方略を決めて翻訳することを自覚してもらう。

課題はネット流行語の翻訳。

第 10 回「異化と同化 1」では、課題のネット流行語の翻訳を検討しつつ、翻訳ストラテジーの大きな方針を解説する。中国語の新語・流行語の日本語訳を検討し、「異化翻訳」か「同化翻訳」による違いを解説。

Ex. ① “春節”「旧正月」(同化)→「春節」(異化)

② “柠檬精” 原義: レモンエキス →派生義: 嫉妬する(自分を揶揄、卑下して使うシーンが多い) 例文: 别人的绝美爱情故事, 让单身狗酸成柠檬精。訳例 1: 他人の美しい恋バナは、「单身狗」(独身者が自嘲的に使う言葉)が嫉妬のお化けになるほどうらやましく感じる。訳例 2: 他人の甘い恋愛の話も、シングルにとっては酸っぱいレモンエキスなんだ。

課題は文化要素(メタファー)の翻訳。

第 11 回「異化と同化 2」では、日中の文化要素の翻訳についてメタファーの翻訳の実践を通して考える。特に日本語独自の「スポーツのメタファー」のうち、「相撲」「野球」の隠喩を取り上げ、その翻訳について辞書の訳語、AI 翻訳の訳と比較しながら、どのような翻訳が意味を伝えられるかを検討する。

課題は「童話の翻訳」。

第 12 回「スコポス理論 1」では、「目的によって翻訳が変わる」ことを実例を通して解説し、機能主義的アプローチの重要性を伝える。読み手を学生自身で設定して童話を翻訳させた結果を検討する。

---

以下の小説を翻訳してください。自身で何歳くらいを対象にしているか設定しよう。大人向け? 子ども向け? 自分で読むのか? 読み聞かせるのか? その他、自由に設定する。



あなたの設定した対象年齢 ( )歳くらい

那天晚上，老两口儿把桃子放在菜板上，正要菜刀把桃子切开，突然从桃子里蹦出来一个胖乎乎的小男孩儿。

“哎呀，我的天哪！”老两口儿又惊又喜，一时不知怎么办才好。

老爷爷说：“这孩子既然来到了咱家，就把他收养了吧！”

老奶奶说：“好吧。这孩子是从桃子里生出来的，以后就叫他桃太郎吧。”

于是，桃太郎就在这里住了下来。

桃太郎眼看看一天一天地长大，很快变成了一个身强力壮、勇敢善良的小伙子。

(陳淑梅「精選日本昔ばなし」より)

---

この課題については、「対象年齢を自身で設定する」ことによって、TTを作成するのがポイントとなる。内容は日本昔話「ももたろう」であり、誰もがよく知っている内容だが、それだけに漫然と訳したTTが目立った。

しかし、その中で「対象年齢を自身で設定する」意味を理解できた学生もいた。

この学生は「自分で読む7歳くらい」という設定をした。以下はその訳文の一部。

---

その日のよる、おじいさんとおばあさんは ももを まないたの上のにせ ほうちょうで ももを切ろうとしました。すると、とつぜんものの中から まるまると太った男の子が とび出してきました。

「おやまあ、おどろいた！」

おじいさんとおばあさんは おどろいたり よろこんだり、しばらくのあいだ どうすればいいのかわかりませんでした。

「この子は わたしたちのところに 来てくれたんだ。この子は わたしたちで そだててあげよう。」

と、おじいさんは言いました。(以下略)

---

中国語で書かれた昔話は、さまざまなパターンに翻訳が可能だ。日本語では対象年齢によって、その言葉遣いや漢字の使用範囲などを変える。親の読み聞かせ用であれば、ある程度漢字は使える。しかし教科書であれば、小学校の指導要領で決められた漢字を使う必要がある。上の訳文を作成した学生は、7歳(小一)をイメージしたが、「切る」「太った」「来た」「言いました」など1年生では習わない漢字を使うことについての是非についてはあまり考慮しなかったという。教科書に限らず、童話や絵本がどう書かれているかをもう一度観察し、対象と出版形態などを設定してみることを提案した。プロの翻訳者であればどうするのか、を考えてもらった。

第13回の「スコポス理論2」では、ディヴィッド・ロペス『耳のなかの魚—翻訳=通

訳をめぐる驚くべき冒険』(松田憲次郎訳、2021、水声社)を取り上げて、再度「翻訳とは何か」さらに「形式を合わせた翻訳」という課題について紹介する。

この中では、中国の「順口溜」が題材にとられている。“辛辛苦苦四十年 / 一朝回到解放前 / 既然回到解放前 / 当年革命又为谁”について 筆者は 12 通りの英訳を示した。つまり、中国語の七言絶句という形式をどう取り扱うか、という課題に挑戦している。

第 14 回では、「翻訳とは」について再度、牧野成一の論文「翻訳によって何が失われるか」を取り上げる。ここでは、いくつかの日英の訳例を紹介し、翻訳の限界に気づいてもらう。

牧野先生の提示する翻訳の学習の目的は、1 翻訳の限界を知ること、2 外国語学習の目標(ACTFL 米国外国語教育協会) Communication, Culture, Connection, Contrast(対照), Community についての気づき。3 翻訳の面白さと難しさを知る(翻訳で失われるものを目標言語でどこまで表せるか) 4 原文を読むことの意義を伝えること。そして、最終的に翻訳者を生み出すことだとしている。それらの目的に合う授業ができたのかを振り返る必要がある。

### 3.3 実践の振り返り

春学期の授業はほぼオンラインであり、大学の方針で配信授業と課題提出という形態であったため、リアクションペーパーの配布もできず、学生の理解度については明確な結果は得られていない。秋学期は対面で進めているが、まだカリキュラムは半分しか消化していない。しかし、春学期最後のリアルタイム Zoom 授業で得られた学生の感想、また対面授業での反応としては、「翻訳に興味を持てた」、「翻訳は思ったよりも難しいと感じた」、「翻訳する時の注意点がわかった」などがあつた。

武田ら 2014 で挙げている、翻訳通訳リテラシー教育の意義、①翻訳者・通訳者に要求される特別なスキルと知識、機械翻訳の利点と限界などに対する理解を促進する。②多言語多文化社会におけるコミュニケーションに役立つよう翻訳通訳の仕組みについて基本的な知識を持つ。③グローバル化された経済や文化、多文化共生社会、国際政治などにおける今日的課題に関する気づきが促される。④諸外国のように大学院での翻訳者・通訳者の必要性が日本でも認知され、本格的な実施が根付くことに貢献できる---について、「日中翻訳ワークショップ」で、十分に伝えられたかという点とまだ不十分かもしれない。

特に、③グローバル化された経済や文化、多文化共生社会、国際政治などにおける今日的課題に関する気づきが促される、という点については、日中関係、国際経済、ジェンダーなどの内容を翻訳課題としたが、断片的な効果しか上げられていないと思われる。この点については、経済や文化、多文化共生社会、国際政治で翻訳通訳を専門としているゲストスピーカーに、自身の仕事と通訳翻訳との関連と課題について講義をしてもらうことが学生の理解を促進する最良の方法ではないだろうか。

#### 4 終わりに

「ワークショップ」も「演習」も学部3、4年生向けの授業であり、就職活動中や内定を得た学生など、卒業後の仕事具体化にイメージできることが、翻訳に対する興味を持つ要因ではないだろうか。選択授業ではあるが、中国語学科のほぼ全員が履修したことから、翻訳に対する関心の高さがうかがえる。

「ワークショップ」の翻訳リテラシー教育では、「翻訳とは」という根源的な問いから、具体例を使いさまざまな翻訳のあり方や翻訳方法を知ること、中国語から日本語に置き換えるだけの翻訳から、翻訳の目的やTT読者を意識することなど、さまざまな角度から翻訳を考え、実践していき、翻訳のコンピテンス(能力とスキル)を身に付けていこうとした。結果としては、演習授業では取り上げていない翻訳理論、翻訳の基礎知識などを提供すること、例えば様々なAI翻訳の比較検討をすることなどにより、学生の翻訳コンピテンスを向上させることができたのではないかと思う。反省点としては、授業にゲストスピーカーを招き、さまざまな翻訳シーンを知ってもらうことが必要であることを痛感した。前期はリモート授業でゲストスピーカーを招きやすかったのに、実施できなかったことが大きな反省点となった。

しかし、4年生が一人、大学院の日中通訳翻訳専攻への進学を希望したことは、授業の成果ではないかと思う。プロの翻訳者への道を示せたことで、授業の目的を果たせたと思う。また、学生の翻訳基礎体力を作り、語学力と翻訳が複雑な要因と関わっていることを認識してもらったことで、就職後の仕事にも役立ててもらえるのではないかと期待する。

#### 参考文献

- 染谷泰正(2010)「大学における翻訳教育の位置づけとその目標」『外国語教育研究』3, P.73-102. [Online] [http://www.kansai-u.ac.jp/fl/publication/pdf\\_department/03/04someya.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/fl/publication/pdf_department/03/04someya.pdf) (2021年11月1日)
- 武田珂代子、山田優、辛島デイヴィッド(2014)「『翻訳通訳リテラシー教育』の提案に向けて」『翻訳通訳研究』14号, P.1-14
- 武田珂代子・山田優(2017)「翻訳通訳リテラシー教育のすすめ」『翻訳通訳研究の新天地』晃洋書房, P.190-217
- 武吉次朗(2007)『日中中日翻訳必携』日本僑報社, P.38-76
- 武吉次朗(2007)「中日翻訳7つのテク」『中国語ジャーナル』2007年5月号, アルク, P.41-52
- 武吉次朗、遠藤紹徳(1990)『東方中国語講座4 翻訳篇』東方書店, P.15-93
- デイヴィッド・ロペス(2021)『耳のなかの魚—翻訳=通訳をめぐる驚くべき冒険』松田憲次郎訳, 水声社, P.128-132
- 陳淑梅(2008)「精選日本昔ばなし」『中国語ジャーナル』2008年7月号, アルク, P.66-67

山田優・立見みどり(2018)「翻訳通訳教育のオンライン教材化(e-learning化)に向けて」 「日本通訳翻訳学会:翻訳通訳テクノロジー研究プロジェクト」 <http://www.apple-eye.com/ttedu/usecase.html>

牧野成一(2011)「翻訳によって失われるもの」 『Journal CAJLE』 Vol. 12, カナダ日本語教育振興会, P.23-59